

道徳の規範性とアイデンティティ

－コースガードにおける一人称的倫理学の可能性－

鈴木かのこ（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：道徳、アイデンティティ、客観性、反省

序論

私たちは日常の中で、自らの良心を試されるような場面に遭遇することが多々ある。道に落ちている一万円札を見つけたとき、人は「警察に届けるべきだろうか、それとも自分のものにしてしまおうか」というように、「べき」をめぐる道徳的葛藤に悩まされる。しかし、そもそも私たちはなぜ倫理や道徳といったものを気にしなければならないのだろうか。本論文では、時として私たちを苦しめる道徳的要求に対して、それらの要求が正当性を持ち、私たちが道徳的行為へと向かわせるだけの意味のあるものであるということを証明する手がかりを探る。こうした探求のために取り上げるのは、カント倫理学の支持者であるクリスティーン・コースガードである。彼女の著作である『義務とアイデンティティの倫理学』において示されている「一人称的倫理学」の妥当性を、彼女と対照的ともいえる「非人称的倫理学」の立場にあるトーマス・ネーゲルとの比較検討も通じて検討することが、本論文の目的である。

第一章 規範性の問い

第一節 古代から近代への移行と「価値」をめぐる革命

コースガードが道徳の規範性について問うのは、古代から近代にかけて、「世界」と「価値をめぐる認識」の間で革命が起きたと考えるからである。近代以前の世界において、世界とは価値そのものであり、人は自然と美徳の実現へと導かれるものであると考えられてきた。しかし、キリスト教時代に墮落した人類という問題に目が向けられるようになり、人間の中に世界は完全ではないのかもしれないという疑問が浮かぶようになった。コースガードはこうした認識の変化を、価値をめぐる革命と呼び、人間は「世界の側にある価値にわれわれが導かれる」という考えから「われわれが世界に価値を与える」という近代的科学的世界観へと変化していったと述べる。しかし、世界に価値を与えるのがわれわれであるとするならば、道徳的要求はどのように生じ、どのようにわれわれを規範づけるのだろうか。

第二節 「規範性の問い」とその条件

コースガードが「規範性の問い」と呼ぶものは、単純な道徳的行為の説明を探す問いではなく、道徳のわれわれに対する要求が正当であることを示す根拠を探す問いである。彼女は規範性の問いが満たすべき条件を三つ挙げる。第一に、一人称的な問いに対する答えであること。第二に、問いに対する答えが透明性をもっていること。第三に、自分のアイデンティティに訴えるものであること。コースガードは、規範性の問いに対する解答を近代の哲学者の思想から得ようとした。彼女が近代の哲学者の立場として取り上げたものは、主意主義、実在論、反省的認証、カント主義的自律に訴える立場の四つである。

(一) 主意主義

近代的科学的世界観を採用し、世界自体には価値が無いと考えた主意主義者は、われわれに道徳的価値を与えるものは、神もしくは「逆らうことのできない力」をもつ主権者の命令であると主張する。しかし、「逆らうことのできない力」とはそれ自体が規範的なものであり、われわれは「なぜ逆らうことのできない力に従わなければならないのか」という問いを立てることができてしまうため、主意主義の主張は規範性の問いに対する答えとして充分であるとは言えない。

(2) 実在論

実在論は「それ自体で規範的なもの」の存在を認めることで規範性の問いに答えることができると主張する。実在論の主張は確かに規範性の問いが陥る無限後退に終止符を打つことができるが、しかしコースガードが規範性の問いに対する答えの条件として定めるものは、それが一人称な問いであり、自分のアイデンティティに訴えるものであることである。実在論の主張は強硬であるが、規範性の問いに対する答えとして充分であるとはいえない。

(3) 反省的認証

実在論を否定し、道徳の基礎を人間の本性に求める方法をコースガードは反省的認証と呼ぶ。彼女は代表的な哲学者としてヒュームを挙げ、その理論は「行為や物事の道徳的価値とは人間の感情が投影されたものにすぎない」という感情論

本要旨は、『2020年度 静岡大学人文社会科学部社会学科 卒業論文要旨集』第17号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。

的な考え方を基礎としていると述べる。ヒュームは道徳的であること、すなわち美德ある人間であろうとすることは人間の自然な欲求であり、それに対して疑問をいさぐ必要などないと主張するが、コースガードは人間のもつ「反省する」という性質に着目し、われわれの反省的本性は自身を単なる快不快の感情以上の何かによって統制していると述べる。コースガードによればそれは自律であり、反省的認証の理論はカントの道徳哲学へと帰結していく。

第二章 自律に基づく反省的認証

第一節 カントの反省的認証

カントの考える反省的認証とは、欲求や衝動といった外部からの命令を統制し、自由な意志のもとで行為する人間の道徳的性質、すなわち「自律に基づく」反省的認証である。カントはわれわれが欲求や衝動を統制するために用いるべき法則は定言命法であると考え、完全に自由な意志によって選択された行為こそ自律的行為であると主張する。コースガードは、われわれの道徳的行為を規範づけるものがわれわれの自律的意志であることには同意するが、それが定言命法によって統制されるという点に対しては彼女独自の見解を示す。彼女によれば、われわれを規範づけるものは自らのアイデンティティの理解、すなわち「実践的アイデンティティ」である。

第二節 実践的アイデンティティ

コースガードは、行為選択が依拠するアイデンティティのことを「実践的アイデンティティ」と呼ぶ。実践的アイデンティティは人間の本性を表し、道徳の規範性はアイデンティティの命じるものから生じる。われわれは「そんなことをしたら自分自身を許せなくなる」と感じる時、自分自身のアイデンティティを失う危機に直面しているものであり、そのような瞬間に義務は無条件的で完全なものになる。そして、コースガードによればわれわれの実践的アイデンティティを支えるものはより根源的で普遍的な「人間としてのアイデンティティ」である。

第三節 道徳法則と「人間としてのアイデンティティ」

われわれの特定の実践的アイデンティティの背後には人間としてのアイデンティティが存在する。われわれは行為し生きるための理由を必要とする人間であり、人間としての自分に価値を見出すからこそ自身の実践的アイデンティティにも同時に価値を見出すのである。このように、人間としてのアイデンティティに価値を見出し、実践的アイデンティティを規範的なものとして扱う人間の反省的本性は、人間が「道徳的アイデンティティ」をもつことによって生じるとコースガードは述べる。われわれの自己理解は人間性に対する尊重を基盤としているのである。

第三章 倫理と客観性

第一節 コースガードの一人称的倫理学に対する批判

倫理は客観性と主張するネーゲルからは、コースガードの実践的アイデンティティは自己理解であるといえながら、根

本的に人間本性に反するような自己理解は排除され、一般性や規範性を必要とするという点に疑問を投げかける。実践的アイデンティティは自己の表現であり、われわれの反省的本性によって規定される。だとすれば、あらゆる自己の表現が道徳の規範性となりうるべきである。ネーゲルは、一人称的道德観とは対照的ともいえる非人称的道德観を唱えることによって道徳の規範性という問題を論じる。

第二節 ネーゲルの非人称的道德観

ネーゲルによれば、道徳とは自身を世界の一部として捉えることであり、「私は何をしようか」という問いではなく、「この人物は何をすべきか」という問いから出発すること、すなわち「私」を普遍化することである。彼は道徳の問題に対して、「自分が相手の立場だったらどう思うだろう」と考えることにより、思考する自己と行為する自己を統合し、非人称的な観点を手に入れることができると主張する。

第三節 倫理と客観性

コースガードも、道徳において客観性は必要ないと考えているわけではない。彼女は理由の本質的な客観性を主張し、われわれは自分のアイデンティティを出発として行為するが、行為する上で必要となる理由は、他者との共有が不可欠であると述べる。われわれは理由には理由で返さないといけなことを知っており、一方的に理由を押し付けることはできない。コースガードとネーゲルの間には、道徳の問題において自己をどのように理解するかという点で明確な違いがある。ネーゲルの非人称的道德観は「自分は他人より重要ではない」と認めることであり、倫理は自分の価値も他人の価値も同様に世界の一部であると認めることから出発する。一方で、コースガードにとって道徳とは、価値ある人間であるわれわれが、どのようにそれを理解し、行為として世界に影響を与えていくべきか、というほかでもない自分に向けられた問題なのである。自分に価値を認められない者が他者に価値を認めることは難しいだろう。コースガードの一人称的倫理学は、近代の世界に価値を与えるための一つの可能性なのである。

結論

コースガードにおける一人称的倫理学の可能性とは、実践的アイデンティティの理解から出発し、その背後にある人間としてのアイデンティティという根本的な人間性の価値を見出す近代的な道徳規範の基礎づけの一つのかたちである。コースガードの一人称的倫理学は、われわれを規範づけるものはわれわれ自身であり、同時に人間としての存在そのものの価値であるということを教えてくれるものである。

主な参考文献

- クリスティーン・コースガード(寺田俊郎他)『義務とアイデンティティの倫理学』(岩波書店、2005)
- トーマス・ネーゲル(中村昇他)『どこからでもないところからの眺め』(春秋社、2009)

本要旨は、『2020年度 静岡大学人文社会科学部社会学科 卒業論文要旨集』第17号に掲載されたものを、著者の許可を得て掲載するものである。許可なく転載することを禁止する。